



大久保 喬 樹 教授



## 大久保喬樹先生を送る

大久保喬樹先生が本学に着任されたのは、一九七九年、今から三十六年前であり、私が大学三年生になった時でした。上代文学の岩下武彦先生と、近現代文学の大久保喬樹先生のお二人が同時に着任されました。まだ三代前半の若々しいお二人により、日本文学科が若返った瞬間でした。日本文学科改め日本文学専攻は、昨年度、近世文学の光延真哉先生をお迎えし、さらに今年度、中世文学の中野貴文先生をお迎えすることによって、すっかり若返りましたが、三十六年前、大久保先生と岩下先生をお迎えした時も、日文は今と同じように若返ったのでした。

あれから三十六年、大久保先生は変わらぬ明るさとダンディさで、日本文学科、日本文学専攻を支えて下さいました。先生のにこにこしたお顔を拝見すると、悩んでいることが些細なことに見える、不思議なオーラをお持ちです。「どうだ、元気か」と学生にお尋ねになるお姿、ゆったりやっていけばいいんだよ、人生は楽しまなきゃという雰囲気をお持ちなのと同時に、実はきっちりとお仕事をなさるお姿に、いつも感服しておりました。お書きになるものは、いつも深みがあり、真の教養を感じさせます。大学教員としての理想の姿がここにあると思います。大学生生活に絶望していた学生が、大久保先生のゼミに入ってから生き生きと勉学に励むようになったこともあります。大学院にまで進みました。先生とお話していると、大きく目が開かれる、そんな感じを学生も持つのだと思います。学生たちが、大久保先生のことを「日文のリチャードギア」と呼んだとき、なるほどと納得しました。日文の先生なのに、西洋の匂いがする、グローバルな格好よさがある、そんな先生です。仏文学から

比較文学へと歩まれ、フランスに何年か滞在なさった先生ならではの雰囲気、世界観。本号に先生がお書きになったご自身の一代記を読むと、その拠って立つところが、よりクリアになり、納得させられます。

大久保先生は、日本文学科主任、大学院学生委員長、比較文化研究所所長、大学評議会委員、学内評議員など、学内の重要な役職を数多くお務めくださいました。時には同窓会でも講演して下さって、卒業生をも大事にして下さる先生でした。三年前の園遊会で八十一年卒の会を催した時も、水谷静夫先生と一緒に快く出席してくださいました。

これまでお世話になりましたこと、心より感謝申し上げます。

実は、来年度も、特任教授として、学生の指導をしていただくことになっています。引き続き、どうぞよろしくお願い申し上げます。そして、今後ますますお元気でグローバルな人生を楽しめますよう、お祈り致します。

二〇一五年三月

専攻主任及び一卒業生として 丸山直子

大久保喬樹先生略年譜・主要研究論文・主要著書



## 略年譜

昭和二十一年九月一二日	茨城県古河市に生まれ、まもなく東京を経て横浜市港北区日吉に転居、そこで育つ。	昭和四七年一〇月	(パリ第三大学)
		昭和四九年一〇月	パリ第三大学比較文学博士課程に進学
		昭和四九年六月	パリ第三大学比較文学博士課程中途退学
		昭和四九年六月	東京大学大学院人文科学研究科比較文学・比較文化修士課程中途退学
昭和二八年四月	東京都大田区立田園調布小学校入学	昭和四九年七月	東京工業大学工学部助手
昭和三四四年三月	同 右		(文学一般担当)
昭和三四四年四月	東京教育大学附属駒場中学校入学	昭和五〇年四月	学習院大学文学部兼任講師
昭和三七七年三月	同 右		(フランス語担当)
	卒業		
昭和三七七年四月	東京教育大学附属駒場高等学校入学	昭和五四年四月	東京女子大学文理学部専任講師
昭和四〇年三月	同 右		(近現代文学担当)
昭和四〇年四月	東京大学教養学部文科一類入学	昭和五六年四月	東京女子大学文理学部助教教授
昭和四二年四月	東京大学教養学部教養学科フランス科進学		(近現代文学担当)
昭和四四年三月	同 右	昭和五八年四月	慶応義塾大学文学部兼任講師
昭和四五年四月	東京大学大学院人文科学研究科比較文学・比較文化修士課程入学		(比較文学担当)
昭和四六年一〇月	フランス政府給費留学生として渡仏、パリ第三大学比較文学科修士課程および高等師範学校に留学	昭和六〇年八月	中華人民共和国南開大学日本科にて集中講義
昭和四七年一〇月	比較文学修士 (maîtrise) の学位取得	昭和六二年四月より一年間	(近現代日本文学担当、同年二月まで)
		カナダ・マクギール大学およびアメリカ・コロンビア大学において客員研	

究員として在外研究

平成三年四月

東京女子大学文理学部教授

(近現代日本文学担当)

平成一一年四月より一月まで イギリス・ケンブリッジ大学に

おいて客員研究員として在外研究

平成二三年六月より七月まで フランス・パリ大学において客員

研究員として在外研究

平成二四年九月

中華人民共和国北京日本研究センターに  
おいて集中講義

## 主要研究論文

昭和四五年一〇月

「山の音」私論 季刊藝術

昭和四六年四月

ドストエフスキーともうひとつのレアリスム 季刊藝術

昭和四七年一〇月

Rimbaud et le probleme de ses deux traductions japonaises (ランボーとふたつの日本語訳の問題) パリ第三大学比較文学修士 (maitrise) 学位論文

昭和五〇年三月

Deux aspects du style de "Yama no oto" 「山の音」の文体特質(二面) 東京

工業大学学報

昭和五〇年一一月

治者としての父性——江藤淳論 国文学

昭和五一年四、七月

象徴の小説——「山の音」論 季刊藝術

昭和五三年五月

二つの日本語訳ランボーの問題 比較文学研究

昭和五五年六月

森鴎外とエリスのドイツ 国文学

昭和五五年八月

言語表現において文学とは何か 国文学

昭和五七年一一月

後期川端康成作品の二相 その一「眠れる美女」 東京女子大学論集

昭和五七年一一月

岡倉天心における言語意識と歴史意識 比較文化雑誌

昭和五八年九月

後期川端康成作品の二相 その二「片腕」 東京女子大学論集

昭和五九年八月

「モーツァルト」一冊の講座 小林秀雄

昭和五九年一二月

岡倉天心初期の芸術理念 比較文化雑誌

昭和六〇年一〇月

西洋と日本への問い 現代のエスプリ別冊「江戸とは何か」

昭和六三年二月

前世紀末中国における二詩人——岡倉天心とポール・クロードルの中国体験



比較文化雑誌

平成元年三月

三つの子供時代の物語 比較文化雑誌

平成二年七月

「人間の条件」における自己超越と日本

精神 『内なる壁』

平成八年六月

美術音楽の近代化と文学 「日本文学史第

一二三巻」

平成九年一〇月

自然意識のモダニズム 日本近代文学

平成一〇年二月

樹木、鳥、ウィルスの黙示録——現代文

学と自然 新潮

平成一一年五月

魔の山の幻影——露伴、漱石、現代文学

新潮

平成一三年三月

桃源と地獄——風流小説としての「草

枕」東京女子大学論集

平成一四年七月

盲目の迷宮——「耳なし芳一」、「春琴

抄」、「ねじまき鳥クロニクル」三田文

学

平成一四年七月

岡倉天心と脱近代思考の可能性 五浦論叢

平成二三年九月

〈代替系〉の世界と文学——カフカ、ボ

ルヘス、大江健三郎、村上春樹」東京

女子大学論集

平成二三年一〇月

ふたつの茶の哲学——ブルーストと天心  
三田文学

平成二五年九月

命ある青人草——日本的心性の展開 そ

の二 東京女子大学論集

平成二五年一〇月

自己充足と自然——ルソー、漱石、トリ

アー 三田文学

平成二六年三月

とりこまれる自然——日本的心性の展開

その二 東京女子大学論集

平成二七年三月

余白と座——日本的心性の展開 その三

東京女子大学論集

主要著書

昭和五四年四月

夢と成熟——文学的西欧像の変貌 講談

社

昭和六二年一二月

岡倉天心 小沢書店

平成三年四月

近代日本文学の源流 新典社

平成八年一二月

森羅変容——近代日本文学と自然 小沢書

店

平成一三年七月

見出された日本 平凡社

平成一五年六月

日本文化論の系譜 中央公論社

平成一六年四月

川端康成 ミネルヴァ書房

平成一七年一月

新訳茶の本 角川書店

平成二〇年二月

日本文化論の名著入門 角川書店

平成二〇年一〇月

洋行の時代 中央公論社

平成二三年二月

現代語訳いきの構造 角川書店